

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(87)

五葉山には残念ながら登ることがない。それどころか生まれてこのかた山らしい山に登ったことがない。それにもかかわらず、天に届くような山に登ったことがあるような気がしているのは、ダンテの『神曲』を読んでいるからだと思う。

読んでいると書いたのは、二十二歳の頃に大学の恩師の読書会に参加させていただいたから、今までずっと三十三年以上読み続けているからである。私の専門はシェイクスピアでイタリア文学には全くの門外漢だ。

それなのに、なぜそんなにこだわっているのかと問われると実はよくわからない。ただ、名前しか知らなかった『神曲』の冒頭の一節に初めて触れた時に、ずっと引き込まれたのを覚えている。「われ正路(まぎち)を失ひ、人生の羈旅半(きりよなかば)にあたりてとある暗き林の中にありき」(岩波文庫・山川丙三郎訳)

に迷って鬱蒼として暗い木立の中にいた」と表現している。

伝わってくるのは唐突感と闇と孤独。五葉山のことを書こうとしながら、私が主宰する劇団シエイクスピア・カンパニーはローマのデーベレ

ダンテの山から

宮城県塩竈市 下館 和己

の活動のことではなく、ダンテの仲間との歩みのことを思い出していた。なぜだろう。おそらく『神曲』を読んでいく行為が、山を登っていくことに近いような気がしたからだと思う。

『神曲』は地獄・煉獄・天国の三つの層を成して、構造が極めて垂直的である。地球の中心にその頂点がつくよう

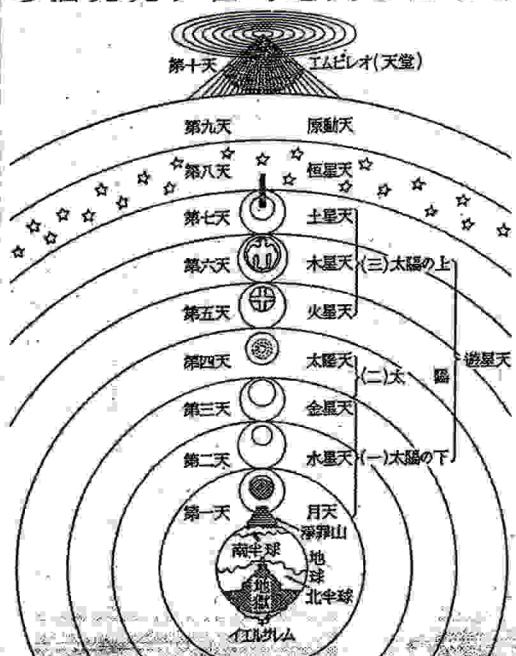
人たちが、ソクラテス、プラトン、ウエルギリウスなどは地獄の手前の薄暗いリンボウというところにいる。

中世ヨーロッパの人たちにとって闇でしかなかったあの世は、ダンテのおそろしく克明でリアルな描写によって、明快な絵が与えられた。ダンテは、自ら創造した宇宙の

と、誰もが信じていた。私は一九九〇年、大学を離れて街に飛び出した。そして集まった三十名の市民の方々と『神曲』を読み始め、三年前に全百曲を読み終えた。私たちの信条は「わからないことをわからないと素直に思い、それをわからないと素直に言い、みんな考えて」ということだけだった。

い。しかし、ひとりではなく、みんなと一緒になく、七十年かけて登ってきたダンテの山から見た景色は息をのむほどに美しい。

西洋古典のエヴェレストとも言われるダンテの『神曲』は、常に私たちの生き方に問いかけてくる、厳しく、大きく、高



「神曲」の全体像(出典:山川丙三郎訳『神曲』=岩波書店)